

人生ハンド仏句

第96号

H. 22. 3. 1
(毎月1日発行)

「お彼岸」

住職 谷川寛俊

「お彼岸」という言葉には、あたたかい響きがあります。春秋の年二回、この季節になると、皆さんそれぞれのお墓参りをします。「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉があります。春の彼岸の頃になると寒さもゆるみ若葉が芽吹き新緑と花の季節は目前です。

秋の彼岸の頃に成ると、夏の暑さも峠を越し、紅葉と実りの秋の訪れが待っています。

お彼岸と言う言葉の持つあたたかさは、その様な季節感からくるのかも知れませんね。

実際、この時期はお墓参りに最も適している気候です。

現在日本は、定められている国

民の祝日は何日かありますが、ほとんどの祝日は仏教と関係有りませんが、その中で春と秋の彼岸の中日春分の日、秋分の日だけが、日本独自のものです。お彼岸の法要はすでに平安時代には営まれていたことは確かでしょう。一般民衆の間に広まったのは、先祖供養と結びついた江戸時代になってからのようです。

日本独自の行事である彼岸の本来の意味は、昔のインドの言葉で「パーラミター」(波羅密多(はらみった)の訳で、「到彼岸(とうひがん)」を略したものです。

彼岸とは、彼(か)の岸に到るという意味です。

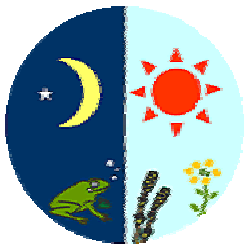
彼岸とは悟りの世界のことです。こちら側の世界は此岸(しがん)といい、悩みと迷いの世界とされています。

年二回の彼岸(春・秋各七日間)は悟りの世界へ渡るための修養期間なのです。それが彼岸の本来の意味です。また彼岸の中日(春分の日・秋分の日)

は、太陽が真東から昇り、真西に沈む日でもあります。

従ってこの日は夜の長さが同じになる日でもあります。太陽を中心として考えれば、一年に二回ある最もバランスのとれた日、といえます。これはお釈迦様が説かれた、どちらにも偏らない「中道」の教え、バランスの取れた生き方と相通じるものであります。

暑くもなく、寒くもない、という日本の季節の中で根付いたお彼岸は、自分を振り返る日でもあるのです。自分を生み育てて頂いたご両親様、その又御両親、いわゆるご先祖様方に感謝の念を心から表しご供養いたしましょう。



花を支える枝
枝を支える幹
幹をささえる根

見えない根っこのお陰様

